

古いものでは符津町の証如上人「真綿の御書」、今江町の教如上人「受取御書」、津波倉町の宣如上人「受取御書」などです。いちばん数の多いのは、達如上人が旧能美郡に百三十通以上交付された「抑世々の先徳」という書き出しで始まる千四百字ほど極めて長い御消息で、粟津組には十七通の存在が知られています。

明治十八年（1855）、嚴如上人より、財政立直しと両堂再建に取り組むために『相続講設立趣意書』が発表され、翌十九年には、向本折村と矢崎村へ相続講の御消息が交付されています。

明治以降、体制への配慮がなされた御消息も見受けられます。昭和十八年、闡如上人より交付された通願寺二十五日講中宛などが代表的なものです。戦後になつて昭和二十五年、闡如上人より交付された『相続講更新御消息』が、現在粟津組御講で拝

と述べておられます。この言葉こそが、相続講の精神ではないでしょうか。

小寄りめぐり⑯ 粟津組 粟津組と御消息

粟津から沖町を経て、白江町にかけての三十三町で構成される粟津組には、七十通以上の御消息が知られています。

読されているものです。本来の相続講の精神に立ち返ろうと出されたものとも考えられます。親鸞聖人は『教行信証』で、

前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え、連續無窮にして、願わくは休止せざらしめん（『真宗聖典』四〇一頁）

大寄りめぐり小寄

真宗大谷派
小松教務所

〒923-0904
小松市小馬出町26
Tel 0761-22-0555
発行者 長澤 秀豊
編集 小松教区教化委員会

ほうおんこう

常磐会館報恩講 2日間

9月30日(土)御伝鈔拝読 午後6時

10月1日(日)法要・ご法話 午前9時半

ほんま ぎえつ
講師 本間 義悦氏 (奥羽教区青森県第2組蓮心寺)

郡中御影の歴史

称佛寺 滋野井

しげのい ひかる
光

石山合戦

長から顕如へ和睦が申し入れられたこともあつたが、最後は顕如が朝廷を通じて信長に和睦を申し入れて、ついに決着するかに見えた。天正八年（一五八〇）三月のことである。

和睦の条件は、本願寺が信長との戦闘を終結させ、顕如が本願寺から退去すること、その見返りが本願寺側全員の赦免であつた。

「腹減ったあ！」いきなり何事かと思われるだろうが、「石山本願寺始末記」という芝居をご存じだろうか。一九九五年七月二十二日、郡中御影四百年記念事業の一環として小松市公会堂でたつた一度だけ上演された芝居である。冒頭の一句は、この芝居の開幕後第一声として発せられた台詞である。

石山本願寺とは、戦国期に現在の大坂城の場所に建てられ、一五八〇年に焼失した本願寺教団の本山である。

天下統一をもくろむ織田信長は本願寺門徒と厳しく対立し、伊勢の長島一向一揆では門徒二万人を「根絶やし」にするなど、凄まじい攻撃を加えていた。莫大な金銭を要求し、さらには石山本願寺の明け渡しまでの迫る信長に対し、本願寺第十一代顕如上人は足利義昭や毛利輝元と組んで戦い挑むこととなる。それが石山合戦である。

手内の御書

郡中御影の交付

この御書の呼びかけに応じて能美郡中の門徒が石山本願寺に馳せ参じることとなつたのである。このときの様子については、小松教区制作のスライドアニメ「教如上人と郡中御影」をご覧頂きたい。

石山本願寺は難攻不落であったが、合戦末期の寺内は常に兵糧不足に陥っていたと考えられ、本稿冒頭の台詞も合戦末期の本願寺内のあり

元亀元年（一五七〇）に戦端の開かれたこの合戦は足かけ11年の長きに及んだ。時には信

能美郡から加勢に行つた門徒衆が実際にどの

ような役割を果たしたのか、実は今となっては定かではない。携えた兵糧もあるいは寺内で届かなかつたかもしれない。徹底抗戦を決意した教如ではあつたが、時に利あらず、八月二日に本願寺を退去した。その後、本願寺は炎に包まれ、灰燼に帰した。「石山本願寺始末記」の中では、能美郡中の人々はほとんどが討ち死にしたことになっている。

時を経て文禄四年（一五九五）、教如上人は石山合戦の折に本願寺へ馳せ参じてくれた能美郡中の門徒衆の労苦に対し、親鸞聖人の御影と父・顕如上人の御影を交付された。この二幅の御影が今日まで小松教区に伝えられている「郡中御影」である。御影の裏書きには、「加州能美郡四日講惣道場物也」とあり、今日の小松教区に当たる地域全体を一つの道場と見て交付されたものであると考えられる。

以来、能美郡中の門徒衆によってこの二幅の御影は別院と見なされ、郡内の村々を巡りながら報恩講が勤められるようになつた。

報恩講と寺庵騒動

それ以来、途切れることなく郡中御影を掲げた報恩講が勤められてきた、とお伝えしたいところなのだが、実は四百数十年の歴史の中で途中百年余の間報恩講が中断されていた時期があつた。その契機となつた「寺庵騒動」など、郡中御影を巡る更に詳しい歴史についてはいずれ稿を改めて書かせていただきたい。

郡中御影報恩講

2017

御影道中 「誰の声だ？」

十二日講門徒会長・参議会議員

中田 郁夫

郡中御影報恩講と御影道中にかかわらせていただき十数年になる。今年初めて全行程で「ふれ役」とでもいうのか、勧帰寺山門前での「お発ち」から、道中の「郡中御影様のお通り」とのお誘いの声、本光寺山門前での「郡中御影様、本光寺へお着き」のご案内まで、五十回以上の声を出し続けました。勧帰寺での「お発ち」の第一声の後半は、なぜか涙声になり、自分でも聞きとれない程小さい声だった。以後は、一回ごとに、「この声は誰の声だ」とか、「自分がこんなことを言つてもいいのか」という思いが、最後まで頭の片隅に残り続けました。確かに自分の口から出ている声を、「誰の声だ?」とか、「誰が自分に言わせているのだ?」という疑問に対する答えは、今もまだ出でていません。

この声かけに応える方々が何人であろうとも、この役割は尊いことなのだと思います、声の続く限り、たとえ答えが得られなくとも、声を出し続けられたことを幸せだと思っています。



郡中御影の裏書に「加州能美郡四日講惣道場物也」と書かれ、教如上人の花押とともに記されています。この二幅の御影は特定の寺院や道場に交付されたものではなく、能美郡全体の四日講すなわち門徒全員に送られたものであると見て取れます。

つまりこの御影こそ「百姓の持ちたる国」と評されたように、門徒衆自らが主体的にそれぞれの生活や地域を守り、本山を護持してきたという証でありましょう。しかしそれはどこまでも仏法を中心とした「寄合談合」が根っこにあったことはいうまでもありません。困難な社会状況においても「場(御講)」を開き、仏法を依り所としてこの無辺の生死海を尽くし、力強く歩んで行かれた姿がそこにあります。

現代社会において私たちは、モノに恵まれ繁栄を享受することで満たされていると思っていますが、実際はバラバラで孤独を深めているようです。そういう時代だからこそ、一人でも多くの方に先人たちの願いに触れていただければと心から願つてやみません。

ご挨拶

教区会議長 能邨 勇樹



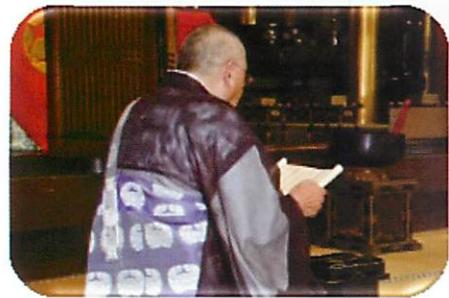
駅前レンガ通りを行く御影道中



お駕籠に納められた御影

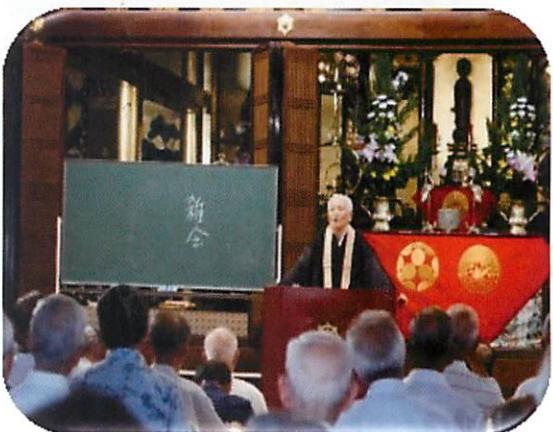


莊厳される二幅の御影



御消息拝読(本光寺住職)

ご法話中の伊藤元氏



ぐんちゅうにつき

当日はあいにくの雨天模様。宗祖親鸞聖人と第十一代顕如上人の御影が納められたお駕籠が雨に合わないよう時間を探つて急ぎ足での道中となりました。「郡中御影様のお通りー！」案内の声は、曇り空にも晴れやかに響き渡りました。

本光寺に無事到着すると、御影は僧侶たちの手で丁重に本堂内陣に莊嚴され、僧侶、門徒合わせて約三百名が出仕、参拝する満堂の中で法要が始まりました。「正信偈」の響きは厳かで盛大で、四百年余り脈々と受け継がれてきた能美郡の真宗門徒の心意氣とその歴史が、身にひしひしと伝わってきました。

郡中御影報恩講は以前、大勢の人々で賑わい、「お旅祭り」「西瓜祭り」と並んで三大祭りの感があったといいます。当時の賑わいとまではいかなくとも、せつゝ賑わいを取り戻したいものです。

私にとつて宗祖とは

行善寺 和樂 賢章

わらく けんしょう

決してこの門徒さんを責めているわけではありません。むしろ、この方から私のあり方を問われたのです。

宗祖とは一般的に、宗派を開かれた方のことをいいます。真宗大谷派では、親鸞聖人が宗祖です。親鸞聖人は『教行信証』をお書きになられましたが、そのときをもって浄土真宗があきらかにされました。そして、私たち真宗門徒は、その親鸞聖人を尊敬と感謝の念を込めて宗祖と呼びます。ですから、浄土真宗が大切だといったときはじめて、「私にとって宗祖とは、親鸞聖人です」と言えるのです。しかし、そう言えるような生き方を私はしているのでしょうか。

以前、ある門徒さんのお宅へ報恩講のお参りに伺ったときのことです。勤行中、お内仏に封筒がお供えされていることに気づきました。

のぞきこんでみると、そこには「年末ジャンボ宝くじ」と大きく書かれていたのです。その方は、「当たるんじゃないかと思って」と話されたので、軽い気持ちでお供えされたのだと思います。しかし、ご本尊である阿弥陀如来は、私たちの願いを叶えてくれる存在ではありません。

私たちは、常に何かを願って生きています。私たちの生き方は、どんなときも「鬼は外、福は内」です。自分に都合の良いことを求め、都合の悪いことを排除していきます。ですから、

私は、「穏やかな人間になる」「悩みや苦しみから解放される」と思って、教えを聞いてきたかもしれません。さまざま出来事によって心は揺り動かされ、いつこうに楽になりません。そのため私は、「教えを聞いてきたのになぜ」「浄土真宗はいざというとき役に立たない」と感じていました。

私は、阿弥陀如来に「私の心を楽にしてください」とお願いしていただけだったのです。それは、自らの願いを叶えるために浄土真宗を利用していくということです。そして、叶わないと思うと、浄土真宗を捨てようと思えました。つまり、浄土真宗をどこかで役に立つものとして受けとめていた、この私に問題があつたのです。

では、親鸞聖人は、浄土真宗をどのようにあきらかにされたのでしょうか。『歎異抄』では、このように語つたとされています。

「私にとって宗祖とは」というテーマは、浄土真宗をどのようにいたしているのかという問い合わせです。ですから、この問い合わせに終わりはありません。どんなときも宗祖親鸞聖人から問われづけています。



弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。（『真宗聖典』六四〇頁）

親鸞聖人は、自身を「そくばくの業をもちける身」と受けとられています。それは、数限りない業を背負い、迷い苦しみから抜け出せない身だということです。「親鸞一人がため」は、そういう身こそたすべきようとする本願であると受けとられたお言葉なのです。そして、救われることのない身だという事實を、本願にどこまでも聞きつづけていかれたのです。

【教区教化事業のご案内】

◇十二日講

日時 每月12日午前9時30分

会場 常磐会館（小松教務所）

講師【9月】芳原 里詩 氏

【10月】山本 龍昇 氏

◇日曜講座

日時 日曜日午前10時

【9月】3日・10日・17日

【10月】15日・22日・29日

【11月】5日・19日・26日

会場 常磐会館（小松教務所）

※各種詳細につきましては、

小松教務所までお問い合わせください。

能美市宮竹の在所のほぼ中心にある、北龍山正林寺はもともと真言宗の寺院であった。宮竹のすぐ近くに長滝という在所がある。平成4年から長滝町の七ツ滝周辺の遺跡発掘調査が大規模に行われた。その際寺院の参道や基礎が見つかっており、その場所こそが正林寺の原点であった可能性があると現住職の亀田文哉氏は語って下さった。

辰口町誌によると、嘉禎元年（1235）8月12日、真言宗正林寺・六代目の住職霖操が宗祖親鸞聖人に出会われ、深くお慕いし、お念仏に歸依し、法名釈法専を賜り、後に改宗するに至つたという記録が残つてゐる。

また、その後も八代賢恵は蓮如上人北国御下向の折に、上人より御寿像を賜り、十二代住職超憲は織田信長との石山合戦の際に宗門護持の為に奮戦した功績を称えられ、教如上人より御寿像と宝剣を賜つたとの記録が残つてゐる。しかし十八代円隨の時に寺院が炎上し、宝物は消失した可能性が高く、いまだ確認はされていない。

前住職は平成22年に亡くなるまで、60年間住職を務められた。現住職の文哉さんは二十七代目。能美市職員を兼務されている。文哉さんに御住職になられた際のお話を聞きした。

正林寺

（能美市宮竹町）

「その時は、絶やしたくない、絶やすわけにはいかない。ただそれだけです。」と語られた。ひとつくちに二十七代といつても簡単ではない正林寺の歴史の重さを実感している文哉さんの姿が印象的であった。

編集後記

▼前号のお詫びと訂正
第一面「小寄りめぐり」
(誤) 蓮鋼 → (正) 蓮綱
訂正してお詫び申し上げます。

▼受け継がれてきたことを、次へ伝え
る端緒となればと心がけています。
▼郡中御影報恩講は、小松教区の門徒さんにとって最も大切な仏事寄りです。▼今回その経緯と苦労を学びなおす意味で、特集ページを設けました。

山内

